



定例会の会員発表要旨（平成 28.03.09）

## 祖父と篠路歌舞伎

星置 大沼 靖男 氏

篠路村は、現在の札幌市北区篠路地区で、安政 6 年（1859）早山清太郎の入植開村以来、150 年以上の歴史を有する札幌周辺で最も早く開拓されたところ。篠路村（当時）は村域が広く、「烈々布」と呼ばれた地域（北区百合が原）は、明治 16 年（1883）に、福岡県人が入植したのが最初。明治 23 年（1890）に大沼三四郎 8 才の時、父佐吉家族と共に現山形県庄内町から入植し、この地に定住した第 1 号。篠路（シノロ）、烈々布（レツレップ）の地名は、アイヌ語に由来。昭和 22 年（1947）祖父三四郎は、戦後初の民選初代村長に当選し、昭和 30 年（1955）札幌市との合併に尽力。昭和 47 年（1972）北区となる。「篠路歌舞伎の歴史」は、座長花岡義信を中心に、開拓農民の青年たちが、最初は明治 35 年（1902）村祭りの奉納芝居として、村人に健全な娯楽を提供したのが始まり。明治・大正・昭和にわたる、長年（33 年間）の演劇活動は、篠路村の開拓・発展の歴史に沿うものであり、開拓期の人と地域のつながりは村人たちにより建立された「花岡義信の碑」がそれを物語る。過酷な大地との戦いの中で根付き、花道や回り舞台を備



えた自分たち専用の芝居小屋（烈々布倶楽部）を作り一流の出し物、玄人はだしの芝居を演じた完成度の高い舞台は、開拓のエネルギーを充満させ、一座の団員は 50 人にも膨れる程となり、青年達や地域の団結や活動の原動力となった。昭和に入り鉄道の発達、都市化による娯楽の増加など歌舞伎をとり巻く時代の急変に伴い、昭和 9 年（1934）に一世一代御名残興行を最後にその幕を閉じた。祖父の死後「幻の篠路歌舞伎」と云われたが、様々な形で掘り起こされ、刊行物、テレビ、ラジオなどで公表され、

広く世に知られるようになった。全国各地に数多く残る農村歌舞伎の中でも特異な存在であり、貴重な農村文化として高い評価を得ている。昭和 60 年（1985）地元有志が篠路歌舞伎保存会を発足・復活させ、「篠路子ども歌舞伎」として現在まで継承されている。「祖父の歴史」は、大沼三四郎と花岡義信という二つの名を持ち、地域の発展と芝居創りに打込んだ一人の男の「骨太の生き様」を物語る。北の大地に根を張り、困難に挑戦し続けた「開拓者精神」と云うべきそのエネルギーの凄さに、今に生きる私たちも、大きな魅力を感じず。今年 3 月 21 日、祖父母の 50 回忌の法要があり、祖父の歴史に向き合い、発表（資料参照 — 七幕（七話）構成の読み語り）の機会を得て良い供養となった。最後に「花岡義信」の披露（星置相撲甚句会の三村、下野氏）で花を添えて頂いた。



## 定例会の会員発表要旨(平成 28.02.10)

※ この記事は、原稿の行き違いがあり、号遅れの掲載となりました

# 新川の歩み

前田 渡部 孝次 氏

新川の生い立ちや歴史などについては、手稲郷土史研究会発足 10 周年記念誌「掘り伝える」で述べたところです。今日は、夏のある 1 日を写真から見てこの川の持つ魅力をお伝えしたいと思います。

札幌市の発展にとって大きな役割を果たしてきた新川ですが、何故か札幌市の歴史の中で豊平川などに比べ、その評価はどの文献をみても正しい評価がされていないように思います。河口一帯が小樽市の領域ということもあるが、明治期に四人労働によって掘削されたという負のイメージを引きずっているような気がする。しかし、時代の語部によって語り継がれてきたのも事実である。



幕末期以前、現在の河口一帯は幕府公認の小樽内場所として、高島場所や忍路場所等とともに鯺漁が盛んで千石場所と言われていた。明治 2 年に開拓使は「蝦夷」を改め「北海道」と称し、「小樽内」を「小樽」に改めている。小樽の語源が「オタルナイ＝小樽内」にあるという根拠となっている。小樽市はどうして大浜ドリームビーチを含めて、新川河口一帯に無関心なのか、石狩市も現在の小樽市銭函 4～5 丁目を小樽市に割譲した経緯から管轄外、札幌市も海岸一帯の管理は小樽市が。このままではいつまでたっても堂々巡りである。海岸一帯は、豊かな浜辺を持ち、ハマナスなどの植生帯が続き、新川河口から新港より、日本一といわれるカシワ自然林が防風林として残っている。かつてこの一帯には小樽内（オタネ）部落があり銭函に通じる橋があり小樽内稲荷神社もあったという。（手稲神社に合祀）

現在の新川は 337 号線を境に様相は一変する。札幌方は、河川整備が進み市民の憩いの場となっている。一方海方は、まったく無整備で海までジャリ道の悪路が延々と続き、人の出入り禁じているような感じがする。

夏になるとこの悪路にも係わらず、海を求めて車の列がひしめき合っている。道内の自治体にも、いち早く海浜公園化を図っている豊浦町は、管理され安全に利用できる海浜公園キャンプ場と高岡オートキャンプ場を備え、遠くからの海水浴客やキャンパーのニーズに対応している。最近では東京のお台場海浜公園が有名である。以前は東京のゴミ集積場（夢の島）であったところだ。

大通り公園から僅か 15km、小樽市、石狩市という道内有数の都市近郊で、歴史的・文化的さらに自然環境に恵まれた新川河口一帯の価値を見直し、誰もが安全で安心して利用できる地域に整備することが急務となっている。

今年は北海道新幹線が函館まできます。次はいよいよ札幌です。ここから小樽に沈む夕日も一見の価値があります。

# 平成 27 年度を振り返って

事務局報告（事務局長代理茂内会長）

この一年を振り返ると、最も大きな節目となる、念願の手稲区民センターでの「歴史資料展示コーナー」の開設であったと思います。一方当研究会が 10 周年を迎え、記念誌の発刊を成し遂げられたこと、さらに新聞報道もあり、大変好評を得ていることではなかったでしょうか。

このように大きな節目を経た新年度は新たな気持ちで皆様の期待に沿えるように努力して参りたいと思います。

## 新年度の基本構想

①手稲区資料展示コーナーの運営 ②手稲区内歴史案内板設置に協力 ③新川開削石狩方面の研究 ④小学校の歴史資料室との連携 ⑤ 地域の方々の聞き取り活動⑥ 会員の専門的な領域紹介 ⑦手稲区ふるさと手稲作り推進事業に協力 ⑧パネル展示などで区民向け P R 活動の展開

### 次回の予定

次回（5月11日）は、「白石区ふるさと会」会長 武藤征一氏の部外講演を予定しています

会場は、区民センター3階視聴覚室です。

## 会員の広場

### 「会報担当」卒業の記

広報部 小田 真二氏

会報は 100 号を迎えることができました。私のパソコンのファイルを見てみますと「会報」のフォルダーのなかには 4 号のファイルから納まっていた。当時の広報部長、高木秀子氏の下でこの作業を担当することになったのでした。発効日は平成 20 年 4 月 9 日となっておりますので、丁度 8 年間、会報編集に携わってきたこととなります。

生来、文章を書くことが苦手、もっとも得手分野は少ないのですが、作文は苦手分野の最右翼です。大学での最初の定期試験を思い出します。試験官達が入って来て、配布されたのは罫線だけが引かれた解答用紙でした。解答用紙が配り終わったところで一人の試験官が胸ポケットから徐に取り出した封筒を開封し、「〇〇〇〇〇について記せ」と板書されました。この問題を見て、私の頭は真っ白です。今、その時の体験がフラッシュバックしています。

もう時期遅れかも知れませんが、作文コンプレックス克服に挑戦しようと思っています。発想法の一つとして川喜多二郎が開発した K J 法というのがありますね。この手法を作文訓練に応用

できそうなのです。それにしても、素材がなければ（ベテランシェフでも、食材がなければ料理ができないように）書く訓練もできないでしょう。さいわい私は資料部を担当しておりますので、そこで素材収集ができます。広報部を卒業（左遷かな?）した1会員は、資料収集から出直すことにします。そのようなことで、広報部からご依頼のありました「何か一筆を……」の課題は、200号までの訓練機関をいただき、それまでの宿題とさせていただきます。

作文嫌いの私が会報編集をここまで続けられたのは、自分で文書を書くのではなく、書いて頂いた文書を割り付けるといふ、頭脳を使わない作業だったからです。ここまで継続できた最大の力は、執筆者、その他の方々のご援助でした。ご支援ありがとうございました。

## 広報部理事に推されて

広報部 永井 道允氏

まともに文法を学んだこともなく、文章作成にはさしたる素養のない私が広報部理事を仰せつかりました。分担は、完成直前の広報紙の校正を任されたのです。私にとってこの仕事は能力の限界を超えた難題です。誤字脱字や句読点・「てにをは」などのチェックだけであれば、何とか私でもお役に立てるかなと思い作業を進めているものの、時々はたと悩ましい問題に突き当たります。

どなたも素晴らしい文書を書かれていて、豊かな内容や巧みな表現に敬服しています。しかし、「長文を分割した方が、文意が伝わりやすくなるのに…」 「言葉を補ったりあるいわ削除したら、より明瞭になるのに…」 「主部と述部の関係を見直したらいいのに…」 「当て字は使わず漢字はできるだけ常用漢字を使えばいいのに…」 「段落構成を工夫したら読みやすくなるのに…」 などと感ずることがあります。

「文は一なり」という言葉があります。その人なりの表現の仕方があり非常に個性的なものです。一字一句細心の注意を払って表現されているものでしょう。どれが正しくて、どれが間違いとは簡単には決めかねるものがたくさんあります。私を感じたことが正しいとはいえないのです。単に表現の好みや癖の問題なのかもしれません。

執筆者が苦労してまとめた文章を、浅学な私ごときが手を加えることが許されるのでしょうか。そんな権限は与えられていないのでしょうか。本来、文章に手を加えたら執筆者の了解を得なければならぬものだと思います。私には「この程度の変更なら、会員のみなさんは許してくれるだろう」との甘えがあり。その都度許可をいただく努力はしていません。できるだけ原文を尊重する姿勢は崩さず、最小限度の手直しを心がけているつもりです。もし、文章をいじられて不快な思いをされた方がおりましたら、深くお詫び申し上げます。

私は校正の作業をしながら、「お前、もっとしっかり日本語の勉強をしろよ!」と叱責されているような気がします。購読している新聞の表記を手本に、これからも研さんに励まなければならぬと思っています。